

〔発言者〕 廣瀬方人

〔発言年月日〕 2013 年

〔生年、被爆地、職業など〕 長崎市で被爆。1930 年生まれ。

〔内容〕

彼(山口仙二さん)が(1956 年の第2回)原水禁大会以後、組織活動に熱意を持ったのには理由がある。首に大きなケロイドを抱え、口もゆがんでまともには水も飲むことが出来なかった。長崎工業高校を卒業後、希望していた三菱造船にも入社できなかった。戦後十年を過ぎたころからようやく明らかにされ始めた放射能の影響で、いつ倒れるかわからないという不安もあった。(中略)原水禁運動が分裂した際に、山口が「どっちも行こうや」と呼びかけたが印象的だった。その一言で長崎被災協は分裂を免れた。彼のおおらかさ、柔軟さが長崎被災協の継続を支えたと私は思っている。(丸括弧内は引用者の補足)

〔注〕

山口仙二のように、世界的に影響力をもつ被爆者のことばを理解するためには、その「ことば」が発せられた社会状況に想像力をはたらかせることが大切である。山口と親交が深く、長崎の被爆者である廣瀬方人は、山口が周囲の被爆者たちから親しみをこめて「仙ちゃん」と呼ばれていたとふりかえる。山口の性格の「おおらかさ」を回想し、「ノーモア・ヒバクシャ」を力強く訴える山口は「連帯」の必要性を認識していたと語る。このように、被爆者により、被爆者のことばが継承されている現実に注目することも、被爆者のことばを理解する手がかりとなる。

(『証言 2013 ヒロシマ・ナガサキの声』)